



対立の文化から共生の文化へ 活動紹介



発行：学苑出版社
著者：張可喜、魏亞玲



人間自然科学研究所

目 次

人間自然科学研究所 活動紹介 No4

2015 年 8 月 中国人民抗日戦争と反ファシスト戦争勝利 70 周年コイン展・北京ブックフェア参加	3
2015 年 12 月 中国南京視察報告書（株式会社エナテクス 磯江部長）	25
2015 年 12 月 中国・北京 対立から共生へ出版祝賀会	32
2008 年 2 月 島根日日新聞 「核大国の結節点にある朝鮮半島と日本列島」	48
2008 年 12 月 国民国連構想を北京から問う 中国古典名言録 出版記念フォーラム	50



2025 年 7 月 23 日
ワールドビジネスサテライト
日米交渉合意



2015 年 8 月 中国人民抗日戦争と反ファシスト戦争勝利 70 周年コイン展・北京ブックフェア参加

作成 2015/08/28

1 回目修正 2015/08/29

2 回目修正 2015/08/30

中国訪問報告書

作成：魏、藤原

1. はじめに

この度は中国訪問に随行させていただき、ありがとうございました。

日中関係が難しい中での出張でしたが、中国で出会う方々は皆様暖かく歓迎してくださり、日本のマスコミの危険性を感じました。

社長の長年ご準備されてきた平和活動がいよいよ具現化する重要な出張であったと認識しています。

また、ご多用の中、出張時業務を対応していただいた営業部の皆様、出張前の資料準備をしていただいた堀江さん、岸本さん、小林さん、ご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。有難うございました。

2. 日程概要

【期間】2015 年 8 月 25～28 日

【スケジュール】

25 日：移動（JAL276 出雲～羽田→CA182 羽田～北京）

26 日：「中国人民抗日戦争と反ファシスト戦争勝利 70 周年コイン展」参加
第 22 回北京ブックフェア視察（今人社「悠久の河」等、展示）

27 日：邢雁先生弔問、奥様見舞い
中国人民抗日戦争記念館視察
夕食会

28 日：移動（CA181 北京～羽田→JAL285 羽田～出雲）

【メンバー】小松社長、魏、藤原

【全行程同行】張可喜先生（8 月 25 日 20:00～23:20、8 月 26 日、27 日）

3. 詳細

(1) 「抗日戦争&反ファシスト戦争勝利 70 周年コイン展」とシンポジウムへ
小松社長が招待参加。

- ・展示会主催 中国对外友好協会
- ・場所 中国对外友好協会の構内にある平和宮
- ・会期 2015 年 8 月 26 日～ (15 日間)
- ・式典

参加者 100 数名

招待者 中国金貨総公司社長の張漢橋様、シンガポール造幣局の副総裁の陳裕強様、中国印金銭造貨幣総公司、上海造貨幣有限公司、八路軍研究会、新四軍研究会、海外駐在元大使をはじめ
の外交官 OB など、

【展示会宗旨について】

中国人民对外友好協会が主催する「中国人民抗日戦争と世界反ファシズム戦争勝利 70 周年コイン展」は 2015 年 8 月 26 日に中国人民对外友好協会の平和宮で開催。今回のコイン展は「歴史を銘記して、烈士を紀念し、平和を大事にし、協力発展する」をテーマとして、「平和の大事さ」、「歴史の銘記」、「協力と発展」という三つの部分に分け、世界の 48 国家と地区で 70 数年来の発行された数千枚の第二次世界戦争を題材とした紀念コインから 300 枚を精選して展示する。

そのほかに、歴史的な写真や文字の解説も展示されます。紀念コインという独特な形式を通し、中国人民抗日戦争と世界のファシズムに反対する戦争の勝利 70 周年を紀念すると同時に、世界各国人民が世界の正義と平和に対しての優れた貢献を全面的なイメージとして表現し、さらに平和、協力、発展する理念を世界へ伝える。今回の紀念コイン展は約 15 日間の開催を予定。世界的規模で初めて多くの国の主権に関わる貨幣を集める方式で、世界のファシズムに反対する戦争の勝利を紀念するものである。

【経緯】

張可喜先生に多くの中国の人々に小松社長の「和の文化」の理念を知って頂き、世界の平和事業にご協力、共に行っていくということで、知人の「北京文化名人倶楽部」事務局長を通して今回のイベントに参加招待して頂いた。その知人から「中国電影藝術研究センター・北京文化名人倶楽部」の張玉屏

様を紹介され、この張様より手配頂いた。

このイベントに唯一の日本人として参加するのに審査が必要。張先生より、社長のこれまで行ってきた世界平和活動を纏め、提出したところ、参加招待を頂いた経緯があった。

※張玉屏様：元中央電視台（中央テレビ局）映画公開前の審査員として勤めておられた。退職後、「中国電影藝術研究中心（センター）」と「北京文化名人倶楽部」に所属し活躍しておられる。ほかに個人的に北京市郊外に観光用果樹園を経営されている。

【中国对外友好協会内にある平和宮外観】



平和宮の展示会外観



小松社長、張可喜先生、魏

① 開催セレモニー

【挨拶 中国对外友好協会謝元副会長、中国金貨総公司の代表など】

謝元副会長の挨拶では、「貨幣は国家主権の記号の一つで、1つの国家の文化の歴史である。紀念貨幣章が歴史の画面を彫り刻んで、歴史の瞬間を捉え、地域と文化の境界線を突破することができるもの。1つの独特な視角から歴史の過程を現し、平和の理念を伝えていくものである。今回の展覧を通して、中国と世界の各国の発行した紀念コインと有機的な融合することを望んでいる。全面的に中国人民の14年にわたって堅忍不拔な抗日戦争が世界平和のためとファシズムに反対して戦争勝利のために大きな犠牲を払い貢献したことを紀念し、積極的に世界へ各国の人民と一緒に広範に平和、協力、発展という理念を広めたい。

世界の 48 の国家と地区の発行された千数の第二次世界戦争の題材の記念コインの中から 300 近くを精選して展示している。世界範囲内で、初めて多い相關国家の主権貨幣を集めるという方式で世界のファシズム反対の戦争勝利を記念し、いっそう今の平和な生活を大切にしっかりと守るという。



式典会場の様子



謝元副会長挨拶

【コイン披露と贈呈】

新しいコインの披露を行われ、コンゴの駐中国大使に「平和 70 金銀紀念貨幣」を贈呈。中国抗日战争の元兵士の 2 人（91 才、97 才）、中国国家博物館、中国人民革命軍事博物館、中国人民抗日戦争紀念館、八路軍研究会、新四軍研究会などへ「東方主要戦場紀念銅章」を贈呈。謝元副会長、張漢橋社長はそれぞれ開幕式上で挨拶された。

② コイン展鑑賞



平和宮の地下室でのコイン展示場様子



戦争体験者である新四軍の元帥とお会いし、
唯一の日本人である小松社長と平和を誓う



コイン展玄関にて
右から小松社長、張先生、魏

③ シンポジウム

国務院外事弁、コインメーカー、企画、デザイン設計、元駐日本大使、ドイツ元大使などがスピーチされたが、時間の都合で、予定していた小松社長をはじめ約半数の人が発言できないまま終了された。

主な発言では、歴史を銘記、平和を大切にし、共同发展との宗旨、また、ドイツ元大使からドイツがいかに周辺諸国と仲良くしたかについて紹介された。たとえば、首相の心からのお詫び、教科書で侵略史の教育などでファシズムとはっきりと 1 本の線を引いているなどを挙げられた。そこで、安部総理の戦後 70 周年談話について、言葉表現に工夫されており、誰がどこを侵略したか、はっきりしないというお詫びに誠意を感じない内容だったと指摘。



シンポジウム会場様子



左から張先生、張玉屏様、小松社長、
梅兆榮元駐ドイツ大使様、魏



会食時（式典場所にて）

左から王程様（北京鼎新至尊公司社長、北京文化倶楽部所属）、張可喜先生、張玉屏様、小松社長、李纓様（NPO 法人日中映画祭実行委員会理事、日本映画監督協会国際委員会委員、26 才の 1989 年来日、26 年間在住、「靖国神社」という映画監督）、魏

※コイン展示コーナーで「東方主戦場ドキュメント」映像が流されていた。その場で、この映像をもらえないか、そしてシンポジウム後、本日の会場の映像をもらえないかと、小松社長より要望されたことで、食事会の際、張先生より対外友好協会経済委員会副秘書長（副事務局長）の陳様に打診して頂いたところ、コインコーナーで流しているのは中央テレビの著作権が要るので、確認が必要、本日のイベントの映像は編集できたら差し上げて良いとの回答を頂いた。夕方、ホテルに戻った後、今回の会で全体の映像をいただけるよう小松社長より指示を受け、張先生のアドバイスで、魏より対外友好協会経済合作委員会の陳副事務局長に電話連絡したが、勤務時間外の原因か、会議中なのか、連絡は付かなかった（張先生より、勤務時間外に電話に出ないのが多いとのこと）。翌日 14 時過ぎ頃、再度電話し繋がったため、社長の意向（世界の平和事業に活かしたい。頂いた映像を使わせて作ったものをお送りして承認いただいた上で公開したい旨）について打診したところ、問題ないとの快諾を頂いた。既に、イベントについて編集した映像は中央テレビで流されたとのこと教えて頂いた。

なお、夕食会で、張先生より陳館長が「東方主戦場ドキュメント」（著作権に確認が要ることに対して）をくださると約束とのこと。

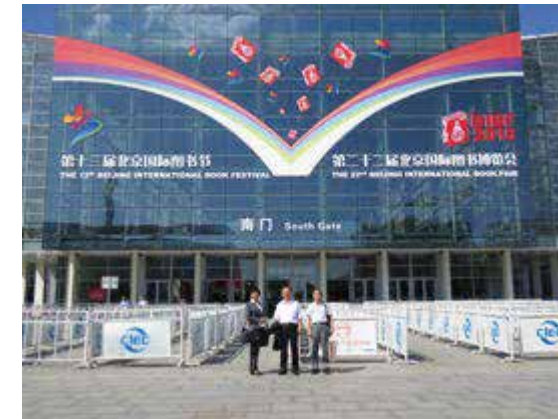
（2）第 22 回北京ブックフェア視察

今回のブックフェアは 1986 年から始まって今年で第 22 回目となる。国家広電総局（国家著作権局）、国務院報道弁公室、教育部、科学技術部、文化部、北京市人民政府、中国出版労働者作家協会、中国作家協会出版で共同主催、主賓国はアラブ首長国、国際的有名な展会ブランドとして展示（展示場で、歌や音楽のリズムに合わせて踊ったりされていた）。

日本からは数十社から出展。今人舎から「悠久の河」をはじめ 20 種類ほど。

展示方法一つをとっても日本と他国では大きく異なっていた。

① 外観



② 今人社「悠久の河」出展の様子



展示コーナー



右から張先生、中嶋様（今人舎編集マネージャ）、稲葉社長（今人舎）、小松社長、魏

③ 日本ブース



④ イギリスブース



日本の場合、出版社毎で本を配置しているため、雑多な印象を受ける。この会社の展示は「科学」でも「社会科学」「人文科学」「小説」といった明確な分け方をしており大変分かりやすい。このことは、社長に言われて初めて分かった。

⑤ アラブ首長国



展示場で歌を歌いながらの踊りの様子

◆テイラー アンド フランシスグループ (Taylor & Francis Group) は、イギリスを本拠とする Informa 社の一部門である学術書出版社。(Wikipedia 紹介文より抜粋)

会社 HP <http://taylorandfrancisgroup.com/>

⑥ 各国展示



(3) 邢雁先生ご自宅訪問 (本年 6 月、86 才でご逝去)

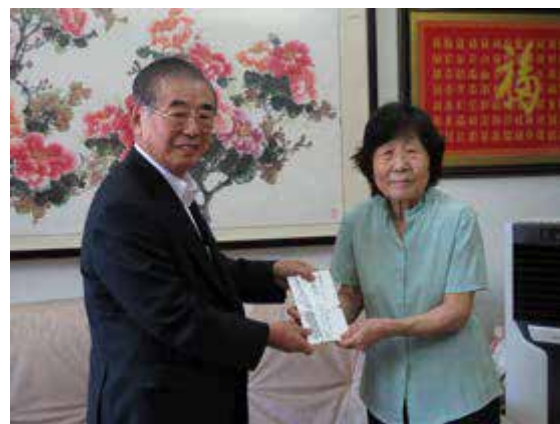
邢雁先生：元「紅旗」雑誌社長、「中国画報」社長、「中国画報協会」会長。社長との縁は、2001 年頃から孔子、孟子、周藤弥兵衛、清原太兵衛の銅像を棗荘台児荘で制作することでお世話になったきっかけで、その後、当社を 2 度訪問され、講演して頂き、孔子孟子像の燕趙園での除幕式の挨拶をして頂いた。

2004 年、当方とばばこういちキャスターが企画した朝日ニュースターで放映される「永遠の隣国」という日中友好交流ドキュメントを作成するために、日中国交回復に大きい貢献された中日友好協会元副会長、簫向前先生を取材した際も、インタビューに応じて頂いた。その後、中国訪問するたびに交流が深まっていた方である。

今回の自宅訪問は初めてであったが、奥様と娘様と話ができ、邢雁先生と小松社長との交流の想いで話や、邢雁先生が小松社長への想いについて振り返って話しをした。邢雁先生のご冥福をお祈りしております。



邢雁先生自宅 左から藤原、張先生、
小松社長、邢雁先生奥様、魏



邢雁先生自宅 小松社長、邢雁先生奥様

●思い出の写真を社長アドバイスでまとめ、奥様へお渡しする（一部抜粋）。



2001 年 5 月 抗日戦争紀念館訪問
前列右から 5 番目



2003 年 10 月 燕趙園孔子・孟子像除幕式
左下：ご挨拶の際の様子

（4）中国人民抗日戦争紀念館視察

【経緯】

社長の本紀念館訪問は、1998 年、2001 年、2014 年に続いて、今回は 4 回目となる。今回は、当紀念館の実権者の李副館長（2006 年 9 月南京国際フォーラムで南京紀念館の朱館長に紹介頂いたご縁）からの招待を受け、訪問した。今年の 1 月～6 月まで全面的に展示場を改造され、7 月 7 日に新しく開館されてから小松社長が初めての日本からの訪問者となっている。

今年は抗日戦勝 70 周年のため、紀念館には多くの来場者で賑わっていた。李館長さんのご配慮で、先に新しくできた応接間へ案内され、お茶を頂きながら

懇談していた。

館内も多くの来場者がいた。私達が行ったとき、訪問当時は既に 1 万人突破。



抗日戦争紀念館正面 右から解説員、張先生、李宗遠
副館長、小松社長、藤原、魏、張玉平主任（事務局長）



抗日戦争紀念館応接間 左から張先生、
李宗遠副館長、小松社長、魏、後列：解説員



館内の様子



館内の様子

専属の日本語の解説員にガイドをしていただく。



左：解説員と小松社長、右側：ある金持の父親より、息子を抗日先生へ送り出した時、送った布に書いたメッセージ：「死、親の側で親孝行より国を守るために抗日戦場に行きなさい。負傷したらこの布で血を拭け、死んだらこれで死体を包んでもらえ」。

展示方法も模型やプロジェクターなどを使用し、見ごたえのある展示となっていた。



毛沢東が延安革命拠点の窑洞で工作中様子 平野地帯の「地道戦」地下トンネル再現

日本軍の行った人体実験等の写真の展示もあったが、そうした残虐行為を非難し活動を行った日本人がいたという写真も共に展示されていた。



日本の全てを否定するための記念館ではなく、日中の友好関係を築き、未来の平和を願うための記念館であるということがわかる展示内容であった。



【日本の反応】同記念館に日本の学生や旅行者が行った記事。

北九州大学生 <http://j.people.com.cn/94473/8171905.html>

京都技術サークル <http://homepage3.nifty.com/Ogino/gijutu/war.htm>

旅行者 <http://blog.world-runner.net/?eid=994>

（５）会食

学苑出版社孟社長をはじめ、「対立から発展へ——小松昭夫の和の文化の理念と実践」という書籍の編集者の李様など 2 名の社員、北京記念館の李副館長、張主任（事務局長）、張可喜先生、門番代理店「北京秦藤物流」孫社長（北京物流大学名誉教授でもある）、「悠久の河」を出版する今人舎の稲葉社長、編集マネージャの長嶋様など、14 名で会食を行った。今人舎と学苑出版社の交流、今人舎と記念館の交流、そして学苑出版社と記念館の交流が盛り上がっていた。学苑出版社の編集者である李点点様は若い女性であるが、日本語が堪能であった。社長の平和活動に大変興味をもっておられ、今後の活動をさらに活気づける良い出会いであった。学苑出版社の孟社長が「悠久の河」に興味を示されていた（最終的に読んでから中国語の出版を判断される）。

ご一緒にいらっしゃった、張先生の奥様と魏の姉が以前同じ職場で働いており（小松社長の活動がきっかけで 2004 年、数年ぶりに再会）、今後は、「ゆう科学通信」を世界に発信する為に中国語の記入や寄稿をいただくこととなった（社長からアドバイス）。

なお、「対立から共生へ——小松昭夫の和の文化の理論と実践」書籍は、10 月出版、12 月までに出版披露シンポジウムを行うことが確認できた。



夕食会 左：小松社長挨拶、右：記念撮影

前列左から張可喜先生、孟白社長、小松社長、稲葉社長、
後列左から藤原、李建文様（張先生奥様）、張玉平主任（紀念館事務局長）、
魏、李宗遠副館長、中嶋様、魏宝玲（魏姉）、孫前進社長、李点点様、繆艾麗様（学苑出版社）

4. 感想

【魏】

業務の忙しい中、中国出張の機会を頂き、ありがとうございます。

今回の中国出張は、「中国対外友好協力」との交流をはじめ、邢雁先生自宅訪問、北京ブックフェアと抗日戦争紀念館の見学、そして夕食交流会など、密度の高い訪問でした。

対外友好協会では、「抗日戦争と世界反ファシズム戦争勝利 70 周年コイン展」の式典を行うと同時に、李会長が韓国の韓日友好協会の朴会長一行を会見、チリ元大統領、チリ中国文化協会名誉会長より講演会も開かれたという。外国の外交官レベルの関係者との交流が行われる中で、小松社長を式典へご招待くださり、そして秘書長（事務局長）と副秘書長（副事務局長）とお話ができ、特に副秘書長と一緒に昼食を取りながら交流ができ、式典やシンポジウムの映像を頂くことになったことに感動しました。この情報をどう活かしていくのか、自分にとって大きな任務だと認識しています。

北京のブックフェアでは、今人舎をはじめ、たくさんの出版社が出展されてブックフェアを賑わせたのが印象的でした。中国で日本の書籍が人気となっていることは行く前に下の情報で見えていましたが、今回の展示会でその確認ができました。

<http://toyokeizai.net/articles/-/72968>

邢雁先生の自宅訪問の際、奥様から邢雁先生の生前の小松社長への思い出話や、小松社長から送った資料（中国語の「魔法の経営」、年賀状、礼状、写真など）を見せてくださりながら邢雁先生を偲ばせて頂いたこと、邢雁先生が小松社長をとっても大切にされたことに感動しました。

抗日戦争紀念館で今回新しく改造された展示について印象に残っているのは、「平和を大切にする」というメッセージ、共産党だけでなく、国民党の軍隊、組織と個人、地方武装団体や地域の金持ちの個人などの抗日戦争への貢献内容を増やされたことでした。

また、李館長が年中無休で国内外からの来訪者対応や習主席の一年に 3 回の来訪の準備と対応で、体調が崩れるほど、年中、一日も休んでいない多忙の日々を送られている中、私どもを迎えてくれたこと、また、夜、当方主催の夕食会にも出て頂き、交流できたことに有難く感じました。

夕食会では、学苑出版社の孟社長が今人舎の稲葉社長との交流ができたこと、そして「私の八月十五日の会」の有名なマンガ家の方々と交流しておられる紀念館の李副館長と交流ができ、驚くほどのご縁を感じました。稲葉社長が大変喜んでおられましたようで嬉しく思いました。今後の「悠久の河」や「私の八月十五日」が中国語で中国での出版と展開できることを願っています。

なお、今回の中国出張報告書作成にあたって、社長よりたくさんのアドバイスを頂き、感謝しております。特に誰がアドバイス、誰の援助を受けたのかを書くことを習慣づけるのが大切、そうしないと信用できないとのアドバイス、そして、中国対外友好協会にイベント全体の映像を頂くにあたって、社長との話の中で、「頂いた内容で作ったものを相手に承諾して頂いてダメの内容があったら止める」とのことを話したら、社長より止めるではなく、問題点を教えて頂き、もう一度修正すること、双方から OK となったとき、それを活かして、価値のある、実際の世界の平和の流れを作るとのアドバイスを頂き、大変良い勉強になりました。今回の出張で得たものを今後に活かしていきます。

業務の忙しい中、中国出張の機会を頂き、ありがとうございます。

【藤原】

この度は貴重な機会をいただき有難うございました。今回の中国出張が、人生で初めての海外訪問であり、見るものが全て新鮮でした。

現在、中国・韓国での反日活動や中国経済の危機がニュースで報道されていますが、実際に中国の方々に聞くと日本で騒がれている程深刻化されておらず「大丈夫、大丈夫」という反応でした。今年は日本からの解放 70 周年ということで、抗日戦争紀念館にも

多くの来場者がいらっしゃいました。「抗日」と聞くと「嫌日」という印象を受けますが、実際の展示物は、中国人のために活動していた日本人の紹介や日中友好を願う日本からの寄せ書きもあり、日中の友好関係を築き平和を願うものでした。同行いただいた、張先生も「中国人で日本を恨んでいる人は、ごく一部であり、日本人も同様に中国を嫌っている人は一部だということをわかっている。政治的にはうまくいっていないが、日本のメディアはどうして対日ばかりを報道するのか」とおっしゃっていました。

帰り道、魏さんにわかりやすい例え話を聞かせていただきました。あるビール会社のビールに 5 本不良品が混じっている。日本では「5 本も不良品があるなんて信用できない」という悪い印象であるが、中国では「たったの 5 本しか不良品をだしていないのはすごいことだ」といい印象をもたれるそうです。日本のカップ麺に虫が入っていた事件で、一時期どのメーカーのカップ麺でも買う人が減ってしまったことを思い出しました。

品質管理の面では素晴らしいことですが、人間関係においては危険な風潮であると思います。

出張の前に抗日戦争記念館の資料作成をしたこともあり、日本人の記念館に行ったレビューを読みました。訪問した日本人が「勉強になった」とコメントしている人ばかりで、「不愉快であった」「日本語ではなしていると嫌な顔をされた」とはどこにも書かれていませんでした。百聞は一見にしかずと言いますが、本当に自分の考え方が変わる出張でした。

今回の出張で学んだことや感じたことを活かせるよう、視野を広げていきたいと思えます。

5. 資料（社長アドバイスで追加）

・「国連関係の件」

・Wedge9 号中国経済より

「満州事変への道」—— 両大戦間期中日関係史・再考

・三和書籍「天略」と「島根核発電所」、学苑出版社「対立から共生へ」

・今人舎新刊 「悠久の河」、「私の八月十五日」、「マンガ外交」

・中国古典名言録 出版記念ファースラム（新聞）

（1）【国連の件】

・【事務総長の件】（社長アドバイス）

国連は 27 日、潘基文事務総長が北京で 9 月 3 日に開催される抗日戦争勝利記念行事に出席すると発表した。

これに対し、日本が批難するという記事がメディアで取り上げられている。

●産経新聞サイト

<http://www.sankei.com/politics/news/150828/pl1508280039-n1.html> より

潘国連事務総長の出席「のこのこ出掛けるのはいかがか」 外務省幹部、強い不快感



国連は 27 日、潘基文事務総長が北京で 9 月 3 日に開催される抗日戦争勝利記念行事に出席すると発表した。軍事パレードにも出席する予定という。これに対し、日本の外務省幹部は 28 日、「中立性に問題がある」として、ニューヨークの国連代表部を通じて国連側に懸念を伝えたことを明らかにした。国際組織のトップが特定の国の一方的な歴史観に基づく行事に参加することを戒めた形だ。

政府は、国連に対して「中立的な立場での対応を望む」などとする考えを伝えた。外務省幹部は「過去ばかりに焦点を当てた記念行事に、国連の事務総長のこのこと出掛けるのはいかがか。強い不快感を持っている」と述べた。

記念行事では、中国共産党と人民解放軍が北京の天安門広場で軍事パレードを行い、約 1 万 2 千人の軍人らが参加、新たな軍事装備品が披露される。ロシアのプーチン大統領や韓国の朴槿恵（パク・クネ）大統領ら 30 カ国の元首や首脳級が出席を予定。一方、軍拡を進める中国の人民解放軍への抵抗感などからオバマ米大統領ら米欧首脳は出席を見送る。

・中国大使が国連本部で写真展開催（8 月 24 日）（魏調べ追加）：

「平和のための記念」写真展が国連本部で開幕＝中国大使「中国の抗日戦争は世界反ファシズム戦争勝利に不滅の貢献をした」—中国メディア

2015 年 8 月 26 日、人民網によると、「平和のための記念—中国人民抗日戦争、世界反ファシズム戦争の勝利ならびに国連創設 70 周年記念写真展」が 24 日、

ニューヨークの国連本部で開幕した。
開幕式には各国の駐国連使節、国連職員、華僑・華人ら 200 人余りが出席した。



(<http://www.recordchina.co.jp/a117580.html> より)



<http://www.cankaoxiaoxi.com/china/20150825/917438.shtml> より

・Wedge9 号中国経済より
「満州事変への道」——両大戦間期中日関係史・再考

太平洋戦争の近因となる満州事変はどうして起きたのだろうか。多くの人は最近の研究成果をもとにした実態を知らないようだ。以下、簡略に説明していこう。

日露戦争後日本は関東州（遼東半島）・満鉄沿線・南樺太を権益としたが、多くの死者を出しつつも日本が圧倒的に勝利していると信じていた国民は講和条約に納得せず、日比谷焼打事件（1905）を起こした。多くの死者・負傷者・逮捕者を出す騒擾は全国で約1カ月続き、日本で初めて戒厳令が施行された。日本の政治に初めて群衆・大衆が登場したのである。それは、第一次護憲運動・米騒動等の群衆騒擾事件へと続くが、日中・日米間の問題にもそれは大きな影を投げるのである。

15年に出された対華21カ条要求は受

諾の5月9日を中国が「国恥記念日」として激しく抗議して来るなど、加藤高明外相による失敗した外交だった。しかし、13年の第二革命時に、第一次南京事件など中国側による一連の日本人暴行事件が起きており、国民大会が開かれ、対中強硬政策を主唱する群衆が外務省・牧野伸顯外相宅に押しつけていたのだった。

だから21カ条要求の時、議会も新聞・雑誌世論も強硬論であつた。帝国主義的と中国側から見られ激しく抗議された第5号要求は削除されたが、朝日新聞は変わらぬ一貫した要求貫徹論であり、吉野作造すら「我国の最小限度の要求を言現わしたもの」として、削除を「遺憾」としていたのであつた。大衆の強硬な世論に外交担当者抗しにくくなっていたのである。

その後、中国国内政治の大きな変化

の中で、革命を支援した日本人は孫文らに歓迎され、他方権益を拡大し長期化しようとした人は反発を買い、日本人が被害を受ければ対中国世論は強硬化した。政府は、多くの期間基本的には中立を保ちつつも、段祺瑞政権を支援するなど内部に大きく関与し、また中国側も日本をうまく利用していた。孫文が、革命資金を得るため満州を日本に委ねることを書いた書類がある。とくに陸軍は、革命軍を支援したり、張作霖を2度に亘り助けたりして、中国の政権に決定的に関与していた。昭和になって関わり始めたのではない。

ワシントン会議（1921）では、中国に関する9カ国条約が結ばれ、各国が協調して現状を維持しつつ中国の自立を助けることが決められ、第一次世界大戦で日本が攻略した山東半島を中国に返還することも決められた。

しかし、アメリカはわずか2年後に排日移民法を成立させ、ワシントン会議による協調体制に大きく水を差した。このとき、国内では巨大な反米運動が渦を巻いた。

一方、中国はワシントン条約に満足せず、日本の条約上の権益を認めないとする国権回復運動を23年以降始める。また、国共合作が行われ、大量の共産党員が入党した結果、5・30事件（1925）のような激しい反帝国主義運動が起きていった。

26年、蒋介石は北伐を開始、27年3月に日英米仏伊人が死傷する第二次南京事件が起きる。英米軍艦は反撃のため発砲したが、日本だけが幣原喜重郎外相の不干渉政策にのっとり攻撃をしなかった。日本国内では激しい反中国世論が起き、幣原外交は失墜する。

27年5月、田中義一内閣は第一次山

「Wedge 9」新・地球学の世紀

満州事変への道——両大戦間期中日関係史・再考

第55回

筒井清忠
Kiyotada Tsutsui
早稲田大学文学部
早稲田大学文学部研究科長



1931年9月、奉天城内を攻撃する関東軍

東出兵を行い英米に歓迎された。しかし28年の第二・三次山東出兵の際には日中両軍が衝突し、済南事件となる。イギリスは26年に一方的に中国の主張を認める12月モラダムを出し、日本の激しい抗議を受けていたが、28年、米中が一気に完全関税自主権を認める新条約を調印するころには、イギリスは中国の列国分断策・日本孤立策を感じたのだった。

28年6月張作霖爆殺事件が起きる。張の満鉄車両への実力行使を直接的契機とした、張に反発する関東軍高級参謀河本大佐による陰謀であった。

一方、中ソ戦争（1929）で、ソ連は東アジア・太平洋地域で最初の都市無差別爆撃を行い、勝利したが、軍事的勝利がソ連の権益の保全・拡大の

承認になったことは、軍事的勝利がそのまま既成事実化されうることとソ連の満州への脅威がいつそう拡大したという二重の意味で関東軍軍人の危機意識をさらに高めたと見られている。

その後、中国は28年に日清条約（通商航海条約）廃棄通告を行い、29年には米英仏など6カ国に早期の治外法権を求める覚書を提出しているが、日清条約を無効とする立場から日本にだけは提出せず、露骨な排除を行った。

前者の際、日本は内田康哉枢密顧問官をアメリカに派遣して、中国にワシントン条約を守るよう説得を依頼したが、アメリカは冷たく、中国を支援していた。

31年、中国は、満鉄を2つの大幹線で包囲し無効にする計画を立て実行し始めた。また、葫蘆島に大規模港湾建設事業を始めたので、満鉄は壊滅的打撃を受ける見込みとなった。

その後、度重なる日貨排斥運動に加えて、万宝山事件・中村大尉事件と続いて、対立は決定的となった。

満州事変時の参謀本部作戦課長今村均大佐は次のように言っている。「私自身も、関東軍幕僚は、よく中央と協調し、機熟するまで隠忍すべきであ

ったと思わないわけではない。けれども現地満州に駐屯していた将校の身になってみれば、毎日毎日、幾千居留民が『また満人にぶたれた』『つばきをはきかけられた』『内の子供が学校へ行く途中、石をぶちつけられた』『家のガラスはめっちゃめちゃに壊されてしまった』『排日排貨運動で、店の品物は一つも売れない』『満人はもう野菜を売ってくれなくなった』『満鉄は満州側の妨害、彼のつくった併行線のため、もう毎年毎年赤字つづきで持ちきれなくなつてしまつてい』と連続泣きつかれ、それらの事実を、目の前にしては、血のつながっている同胞の苦境に、ことごとく同情し、憤慨に血をわきたたせるようになったのは自然である。わが外交機関の行方幾十の抗議なり、交渉なりは、ひとつとして彼に顧みられず、軍の幕僚以下、鉄道沿線に駐屯している部隊将兵の興奮がもう押えきれないようになつてしまつたのはやむを得なかった」。

31年9月18日、関東軍は軍事行動を起こす。ギリギリの対立局面にあったことは間違いないが、その頃、重光葵公使は衝突回避のため最後の交渉を必死で行っており、軍事行動はそれを無

第55回フォーラム「新・地球学の世紀」出席者

発表 筒井清忠（帝京大学文学部部長兼大学院文学研究科長・日本文学・歴史社会学）副座長 川勝平太（静岡県知事・経済史）幹事 会原一幸（東京大学生産技術研究所教授・生命情報システム/複雑数理モデル）、久保文明（東京大学大学院法政学政治学研究所教授・アメリカ政治）、メンバール 大島泰郎（共和化工株式会社環境微生物学研究所所長・生物化学）、加藤秀樹（構想日本代表・政策デザイン論）、金田廣正（東京大学名誉教授・計算科学）、西條辰義（一橋大学経済研究所教授・公共経済学）、佐々木剛（花園大学文学部教授・インド仏教学）、住 明正（国立環境研究所理事長・気候システム）、高橋世織（日本映画大学附属図書館長・文学理論/映像文化論）、中西友子（東京大学大学院農学生命科学研究科教授・放射線植物生理学）、南淵明宏（東京ハートセンター長・心臓外科）、西垣 通（東京大学名誉教授・情報学基礎）、原 丈人（アライアンス・フォーラム財団代表理事・公益資本主義論/途上国開発論）、栗崎寺泰蔵（慶應義塾大学名誉教授・国際政治学）、横山俊夫（滋賀大学理事/副学長・文化史）、和田研光（東京大学名誉教授・生物物理）

にするものであった。

結局、日本はワシントン条約を全体として忠実に守っていたのだが、不平等条約を認められないとする中国は英米と組んで日本を孤立させに来了。イギリスの12月モラダムに対して日本は「ワシントン条約の精神を無視」したと抗議したのだが、中国の策略の方が巧みで見事だった。

日本人に危害を加える中国の実力行使に対し、国内世論は激高しており、一部の軍人はこれに呼応して「暴発」していったが、それは9カ国条約に違反する行為だった。気がつく、日本は、常任理事国までしていた国際連盟から脱退するコースを走っていた。

・三和書籍：「天略」、「島根核発電所」、学苑出版社：「対立から共生へ」

三和書籍

SANWA CO., LTD.

戦後 70 年出版企画新刊

全国の主要書店または Amazon で取り扱いしております。

天略
The Management of Heaven's Strategy
やくも立つ出雲から生まれた新たな「和」の経営理論
早川 和宏

『天略』の全体を貫いている思考こそ
小泉八雲のオープン・マインド
「開かれた精神」である
読むたびに新しい発見がある
小泉凡(小泉八雲曾孫)
三和書籍

**世界のフィランソロピスト20人に
ビル・ゲイツとともに選ばれた小松昭夫**

天子経略とは、天子に求められる
もつとも理想的な治世を現実するための管理法・経営原理である

2013年、オランダ・ハーグにある「平和宮」建立100周年を記念して「世界のフィランソロピスト（指導的慈善事業家）20人」の選定が行われた。

選ばれたのは、平和宮の寄贈者でもある実業家アンドリュール・カーネギーをはじめ、アルフレッド・ノーベル、ヘンリー・フォード、J・D・ロックフェラーに加え、デッド・ターナー、ビル・ゲイツといった古今東西知らぬ者のない顔ぶれ。そのなかに二人の日本人がいた。ひとりとは立命館大学平和ミュージアムの建設に寄与した平和運動の指導者で眼科医の中野信夫氏（故人）、そしてもうひとりが本書で焦点を当てる小松昭夫氏だ。小松氏は島根県松江市に本拠を置く小松電機産業株式会社の創業者。20代の起業以来40年、自治体の水情報ビジネスや応用範囲の広いシートシャッターなどを手掛け、その前年、2012年には「新産業創造」により藍綬褒章を受賞。一方で歴史問題を正面から捉え、地元出雲から隣国の韓国・中国、そして世界に交流の輪を広げ、平和の事業家としての活動を積み重ねてきた奇才。本書では、小松氏がみずから会得し、その行動の根幹をなす究極の思考・「天略」を軸に、この類い稀なる事業家の姿とあゆみを浮き彫りにする。

出版 三和書籍 著者 早川 和宏
全 440 頁

早川 和宏

（はやかわ かずひろ）

1948年生まれ。立教大学経済学部にてマルクスの哲学および弁証法・マックスウェーバーの社会学を学ぶ。卒業後、社会派ジャーナリストとして活躍。心の変革、社会の変革を目標に掲げ、幅広いテーマに取り組んでいる。ひとりシンクタンク「2010」代表。主要著書として『魔法の経営』『日の丸ベンチャー』（三和書籍）、『会社の品格は決沢梁一から学んだ』（出版文化社）など。訳書として、ミナ・ドビック著『ミラクル』（洋泉社）。

出版予定書籍のご紹介

島根核発電所

原発 その光と影

なぜ島根核発電所は作られた
ひとりから核発電政策は変わる

販売 三和書籍 出版 HNS 研究所
著者 山本 謙
編集 吉浦 義己
全 370 頁

対立から共生へ

小松昭夫の「和の文化」の理念と実践

独特な起業家小松昭夫が衆知を集め、対立統合発展を繰り返し、世界の工場環境改善に必要不可欠なシートシャッター門番とクラウドの先駆け総合水管理システムやくも水神の2つの新市場を生み出した。その経験を活かし「和の文化」創造に挑戦する平和事業家へ

出版 北京学苑出版社
著者 張 可嘉 魏 亞玲
編集 李 点点
全 232 頁

・今人舎新刊：「悠久の河」、「私の八月十五日」、「マンガ外交」

今人舎
IMAJINSHA

戦後 70 年出版企画新刊

全国の主要書店または Amazon でお取り扱いしております。

2015
今人舎の近刊

誠実に事を成し遂げる日本人の素晴らしさを世界に！

悠久の河
周藤彌兵衛物語
The Eternal River
A Story of Sutoh Yahee

たった1人で42年。
川の流れを変えた八雲立つ出雲の偉人・周藤彌兵衛の物語。

2015年
秋
発売予定

文 村尾靖子
絵 クミタ・リュウ
英訳 ノビー・キーリー
全30頁

42年間1人で山をけずり、97歳で切り通しを完成・暴れ川の流れを変えた偉人、周藤彌兵衛の物語。地元の作家、村尾靖子の文章に、漫画家クミタ・リュウが渾身の書き下ろし。日・英対訳。信念をもち、誠実に事を成し遂げる日本人の素晴らしさを、世界に英語で語ってほしい。そんな思いを込めた1冊。

●村尾靖子
作家。1944年、山口県生まれ。結婚後、4人の子育て中に執筆活動を開始。1994年島根県文化芸術賞受賞。作品に「命を見つめて」「草原の端になりたい」（岩崎書店）、絵本「母の歌」「おじちゃんせんせい だいだい いーずき」（今人舎）「クラウディアのいのり」（ポプラ社、日本絵本賞読者賞受賞）などがある。

●クミタ・リュウ
漫画家。1940年、岐阜県生まれ。1973年日本漫画家協会賞・優秀賞、同賞大賞、1977年モントリオール国際漫画家展1位、1981年読者国際漫画大賞、1988年イギリス・ワディントン国際漫画家展1位など各賞受賞。東京新聞、中日新聞、共同通信に政治漫画を執筆中。日本漫画家協会理事。

●ノビー・キーリー（Nobby Kealey）
イギリス・マンチェスター出身。シェフィールド大学にて日本語を専攻。来日後はカメラマンとして活躍する一方、英語教師のほか、その味のある内容を生かし数々のテレビCMに出演。現在松陰学園イングリッシュ・スクール校長。

文と絵の両方から
歴史を学ぶことが
できる。また、
英語の学習にも
役立つ。

一文ごとに
読み進めながら
英語の学習にも
役立つ。

私の八月十五日

昭和二十年の絵手紙

漫画家や著名人らが文と絵で語り継ぐ昭和二十年八月十五日・終戦の日の記憶集

ご寄稿者：
高倉健、黒柳徹子、松本零士、ちばてつや、林家木久扇 他 70 名以上

① 昭和二十年の絵手紙
著 / 私の八月十五日の会
全 64 頁

② 戦後七十年の肉声
編 / 8・15 朗読・収録プロジェクト実行委員会
全 48 頁

③ 戦後七十年を過ぎて
編 / 8・15 朗読・収録プロジェクト実行委員会

マンガ外交

南京大虐殺記念館からはじまった

南京大虐殺記念館からはじまった 漫画家たちのマンガ外交。赤塚不二夫、ちばてつやら、幼年期を中国で過ごした引揚げ者である漫画家たちを中心に結成された「私の八月十五日の会」。同会の漫画家たちによって開催された南京市での「私の八月十五日展」を、エピソードを交えて紹介。

著 / 石川好 編集 / こどもくらぶ
全 144 頁

今人舎
IMAJINSHA

南京中国視察の旅

（2015 年 12 月 12 日～12 月 18 日）

株式会社エナテクス

経営戦略本部長 磯江公博

はじめに

極東国際軍事裁判（東京裁判）で「日本兵は南京市各地でさまざまな残虐行為に及び、最初の6週間に南京及び近郊で殺害された民間人と捕虜は 20 万人以上」と言及した南京大虐殺事件に関し、中国が 2015 年 10 月、世界記憶遺産に申請した関係文書 11 件が登録された。「南京」を巡っては、虐殺の規模など日中間で現在も激しい論争が続く。中国側は犠牲者を「30 万人以上」と主張しており、南京大虐殺記念館では「300000」と犠牲者数を刻んだ巨大レリーフが来館者を迎える。昨年、習近平国家主席が初参加し国家追悼式典（公祭式典）に決定された式典に引き続き、第 2 回目となる公祭に、記念館ルートで参加した 40 人の日本人招待者の一人として参列した。式典招待に関わる一連の行事（南京北京中国視察）を通して感じた現在の日中関係に対する所感を取りまとめる。

1. 南京大虐殺犠牲者国家公祭式典

12 月 13 日、侵華日軍南京大虐殺遭難同胞紀念館（中国侵略日本軍南京大虐殺記念館）で、中国政府主催による犠牲者国家公祭式典が行われた。われわれ一行は、平和の事業家として記念館から公式招待を受けた小松電機産業株式会社代表取締役、財団法



小松社長に随行し国家公祭に公式参加

人人間自然科学研究所理事長の小松昭夫氏に同行し、この式典に参加する機会を得た。当日、式典は防空サイレンが鳴る中、犠牲者への追悼、平和宣言の詩の斉唱、陸海空軍の献花、黙祷、中央政府を代表者の演説の順で執り行われた。中央政府を代表する李建国氏の挨拶では、抗日戦争勝利 70 周年の式典、世界記録遺産



翌日の日本海新聞に公祭の記事が掲載された

登録に触れ「犠牲者の追悼は怨念の継続ではなく、歴史を認識することで平和を祈念し、未来を創造する」の趣旨でおこなわれた。

一方、昨年に引き続き「国家公祭」として国家レベルに格上挙行された式典は、虐殺を逃れた生存者ら約 1 万人が参列し大々的に行われた。そして、全世界へ向け世界記憶遺産登録、「正義必勝」「平和必勝」「人民必勝」をテーマとする記念館拡張工事で展示内容を一新。また、インターネット上では事件を多角的に取り扱ったサイト「国家公祭網」の開設、旧日本兵が行ったという強姦、殺戮の残虐なシーンを“史



昨年の公祭での鼎（かなえ：権力の象徴）除幕

実”として表現したマンガ「南京 1937」の出版等、あらゆる手段を講じて時間をかけて世界へ南京事件を発信している。

改修された記念館で目を引いたのは、大型スクリーンに映し出された昨年 12 月の「南京大虐殺記念館」で行われた追悼式典の様々と、出席した国家主席習近平が青銅製の巨大な鼎（かなえ）の追悼モニュメントの除幕の様子が映し出され、中国共産党の中国に「ふさわしい」世界的地位を取り戻すといった長期的な戦略・政略がうかがえる映像である。習主席は 3 月の訪独時にベルリンで演説した際にも、中独関係に関わりのない南京事件に言及し「30 万人以上が殺害された」と強調し、国際社会に旧日本軍の「残虐行為」を宣伝することで、世界の世論を誘導し、日本に対する包囲網を構築しようとしていると強く感じる展示であった。

2. 南京慰安所陳列館訪問

施設は 2014 年 11 月から南京利済慰安所跡を補修・保護・陳列作業をおこない、本年 12 月 1 日に陳列館として開館式が開催したばかりで試行運用を開始した。一般公開はしていないが、南京大虐殺記念館の分館に位置づけられ、「慰安婦をしていた場所」と元慰安婦女性が自ら確認した「慰安婦」をテーマとして中国大陸で初めての記念館である。この展示では 166 か所の上海日本軍の「慰安所」の分布図、最近収集された中国慰安婦 20 人の生存者リストと写真が公開され、大量の実物品、地図、公文書などの貴重な資料をもって、日本軍国主義が設立した慰安婦制度の甚大な罪をさらけ出している。慰安所中庭に設置された「身ごもった慰安婦の像」、壁面に飾られた「証言した慰安婦の顔写真」、「慰安婦」を定義し日本軍国



世界各地の慰安所（166箇所）

主義の野蛮・残虐・暴挙を訴える「プレートのまえがき」。これまで従軍慰安婦問題を対日カードとしては積極的に使ってこなかった中国が、韓国と共同でユネスコ世界記憶遺産に登録申請する準備が着々と進められている。

一行の中に、ドイツ人の慰安婦研究者ルース・ハロー博士（Dr. Ruth Halla）も参加していた。中庭で、博士が研究成果の一部を発表した。「慰安所にいた被害者は決して売春婦ではない。慰安婦は誘拐、法律に反した行為、色んな手口で集められた。慰安所に来てしまった女性たちに、もう自由はない・・・（巻末に詳細添付・博士の論文は製本され館内に展示）」博士の締めくくりとして、「歴史を知らなくてはならない。彼女たちを助けなくてはならない」と、慰安婦救済への時間が短いことを強調した。



設置された身ごもった慰安婦像

3. 朱成山南京記念館名誉館長

朱名誉館長とは 2008 年、小松社員として記念館を訪問した以来の再会である。朱氏は 23 年間記念館館長として勤め 10 月下旬に退官、現在は南京記念館名誉会長を初め世界平和人権教育基金理事や中国博物館協会委員等の様々な要職に携わっている。朱名誉館長は、南京大虐殺記念館の世界遺産登録、そして南京利済慰安所跡の補修・保護・陳列作業を通して「愛国主義教育基地」としての陳列館開館の中心として活躍した人物だ。

エピソードがある。南京大虐殺記念館国家公祭が終了し、朱成山名誉館長の御招待で食事を一緒にさせていただくこととなった。同席された日本人の石川好（漫画家、酒田市美術館館長、ノースアジア大学客員教授）、中国人の任景国（通訳）、曹保明（作家）、柯銀斌（平和研究家）と共に我々 4 人が招待された。

乾杯を繰り返すにつれ、朱館長の功績を各人が話し出した。任景国（通訳）氏は、朱名誉館長は退官前の大きな行事として、習近平国家主席が出席する南京大虐殺記念館式典を国家行事として格上げた国家公祭式典の開催、さらに記念館の増築工事の完成、また旧日本軍の慰安所とされる廃屋を南京慰安所陳列館として保存等の事業に尽力した。怖いもの知らずで、共産党の主要な建築担当者要人を向こうに回し、陳列館建築、デザイン、展示物配置まで細かく指示し、中国共産党が決定した計画まで変更してしまったと披露。それに対し、石川（日本人漫画家）氏が、「朱主席」と呼んでいいかと持ち上げ、実態は無冠の帝王でも世界の華僑とも親し間柄で実力者であると披露された。柯銀斌（平和研究家）は、退官後 1 億円の寄付金を受け、非政府組織の世界平和人権教育基金会を立ち上げたことも紹介された。

「館長の次の就職先はどうなるのか?」「中国名士の 10 人の中の一人に当る。」「アジア局長のレベル以上の給料をもらっている。」「来年の日本の叙勲に館長を推薦する。」等々の冗談も交えて場が盛り上がり、乾杯の連続。朱館長からとうとう「2006 年以降は中国高級幹部だから海外へは行けなかった、今は何処にでも行ける。来年はもちろん日本・出雲に行く」と宣言された。

4. 「対立から共生へ」学苑出版社出版記念



朱館長の招待で開催された夕食会に出席



朱館長（後列左 3 番目）と過ごした食事会

の



12 月 15 日の午後、『対立から共生へ 小松昭夫の「和の文化」の理念と実践』出版記念会が北京で開催された。元日本駐在新華社記者で、現在、新華社世界問題



挨拶する小松理事長

研究センター研究員の張可喜氏と、財団法人人間自然科学研究所理事の魏亜玲

氏が編纂し、学苑出版社から『対立から共生へ』というタイトルで出版された。この本は、小松昭夫氏がこれまでの活動、発表した文章や講演、マスコミ取材の関連記事、そして著者が小松昭夫氏と交流して感じたことなどに対して総括し、「和の文化」の理念及び 20 数年間にわたり各地で反戦平和活動を展開してきた功績について紹介している。

会場は、当書の著者である張可喜氏、及び魏亜玲氏、学苑出版社社長兼総編集長の孟白氏をはじめ、各界の関係者 60 数人が出版記念会に出席した。翌日の新華社日本

スピーチに聞き入る 60 人を越える参加者

語

ネットワーク新聞の記事に張可喜氏の想いが掲載されていた。『張可喜氏は出版記念会で次のような見方を示した。小松昭夫氏の「戦後責任」論は歴史の流れに一致し、日本の歴史認識問題の解決のために正しい思考を与えている。「戦後責任」を履行し、「和の文化」の理念を実践してようやく、東アジア諸国に

平和的共存、協力・ウィンウィンを実現させることができる。張可喜氏は出版記念会で『「和の文化研究会」の設立に関する提案書』を読み上げ、より多くの人々が小松昭夫氏の「和の文化」の精神を学習し、反戦平和行動に参加するよう呼びかけた。』



会場で紹介された小松氏の著書・論文

5. アラカルト

◆天安門訪問天安門：

私が町会議員に初当選した 1989 年、中国天安門では政治改革を求める学生を中心に 10 万人の人々が広場に自然発生的に集結。やがて国中の都市に波及し、鄧小平の決定で北京市に戒厳令が布告された。武力介入の可能性が高まり、政府は学生たちに対しデモの平和的解散を促したが功を奏さずデモ継続が強制されたため首都機能は麻痺に陥った。6 月 4 日未明、中国人民解放軍は軍隊と戦車で北京の通りに移動して無差別に実弾を発射し、武力弾圧を決行した。中国共産党の発表では、「事件による死者は 319 人」となっているが、正確な犠牲者数は今なお明らかにされていないが、数百人から数万人に及ぶなど、複数の説がある。



早朝の天安門広場

この事件は、議員になったばかりの自分にはショッキングな事件で、戦車の前に立ち向かう青年の姿が

いまでも忘れられない。是非、その現場を確認しようと早朝 5 時に往復 12 キロの距離を徒歩で出かけた。マイナス気温が痛く感じられる官庁街をひたすら歩いた。国旗掲揚式を見ようと、多くの中国人も広場に向って歩いている。ようやくたどり着いた広場は厳戒態勢が厳しく、広場に入るのもセキュリティーチェックを受ける。26 年前、この場所には多くの志・命が生きていた。感無量のひと時であった。

◆PM2.5 問題

中国を訪問する前に北京では、重度の大気汚染が 72 時間以上続く見通しになったとして、4 段階の警報の中で最も深刻な「赤色警報」が発令された。厳しい車両規制を実施するほか、幼稚園や小中学校には休園や休校を勧告し、工場の操業も制限された。出発前に大量のマスクを買い最初の訪問地場所南京空港に到着。市中心部は、朝もやのようなスモッグに包まれ、高層ビルの上部は見えなくなり、多くの人がマスクを着けて歩いている。ネット上では「もはや人が住むのに適さないレベルだ」などとの書き込みが相次いだ。北



マスクしてバイクに乗る男女

京ほどではないと思っていたが、南京も相当なものだ。

ところが予想に反し、北京空港に到着前に上空から眺めていた時はスモッグでまったく市街地が見えなかったが、到着と同時に強風が吹き荒れ、一瞬にしてスモッグが晴れてしまった。こんなことがあるのかと思われるほど素晴らしい青空と空気である。北京では、帰国後、再び「赤色警報」が出されていた。30 年前当時の日本の高化学スモッグ・水質汚染等の経済発展に伴う公害問題が、グローバル世界では一国の問題に収まらない。一瞬にして青空に変えた偏西風は、朝鮮半島、日本、ひいては地球温暖化へ繋がっていくのである。

6. 考 察

中国を訪れる前に、小松社長から 1 冊の本を紹介された。「マイケル・ピルズベリー著『China2049』（秘密裏に遂行される世界制覇 100 年戦略）」である。元 CIA 長官ジェームズ・ウールジーの推薦の言葉が記されている。『本書は CIA のエクセプション・パフォーマンス賞を受賞したマイケル・ピルズベリーの CIA における経験に基づき書かれており、「親中派」の一人だった著者が、中国の軍事戦略研究の第一人者になり、親中派と袂を分かち、世界の覇権を目指す中国の長期的戦略に警鐘を鳴らすことになるまでの驚くべき記録である。』

著者は『中国は、過去 100 年に及ぶ屈辱に復習すべく、中国共産党革命 100 周年にあたる 2049 年までに、世界の経済・軍事・政治のリーダーの地位をアメリカから奪取する』とし、『中国の真の姿は、

孫子の教えを守って如才なく野心を隠し、アメリカのアキレス腱を射抜く最善の方法を探し続ける極めて聡明な敵だ。我々は早急に強い行動を採らなければならない。』としている。

現代中国の国家戦略は中国人の歴史的知恵の産物であり、中国の国家戦略は孫子の兵法や戦国策から導かれる「勢」と言う思想に基づくと指摘。「勢」とは、『適が従わずにいられないような状況を形成して敵を動かし、これに打ち勝つための神秘的な力』という。

さて今回の視察は、上記の 1 冊の本から、習近平政権の“手の内”の警告を情報として携えての訪問となった。その視点で、南京大虐殺記念館の国家公祭への格上げ・世界記録遺産登録、南京慰安所陳列館整備、旧日本軍第 731 菌部隊の犯罪の証拠収集・展示を考察したとき、100 年マラソンを走っている中国の現実を見るようだ。とはいえ、中国の中でも、朱成山南京記念館名誉館長をはじめ、新華社世界問題研究センター研究員の張可喜氏朱名誉会長ほか、小松氏の多くの友人が平和を愛し行動している現実もある。

小松社長の理論である、『日本を取り巻く近隣諸国には、歴史問題から生まれた紛争の拠点である「怨念発電所」が次々と作られている。孫子の言う「敵を知り己を知れば百戦危うからず」から、核の時代・グローバルの時代に入り、戦略的思考、政略的思考を超える手法、そこから生まれる反日の怨念エネルギーを対立から統合・発展に促し、平和への流れを産み出し、叡智の結晶である古典から学び、人類の葛藤の記録である歴史を活かして、国家レベルから地球レベル、国益から世界益へ導く理想的な治世を実現するための管理方法・経営原理の“天略”がいま求められている。新たな世界秩序が問われている。2008 年北京で発表した構想、そこには国ではなく、力でもなく、知と愛とのバランスの取れた自由な市民たちによる「国民国連」がその役割を果たす。』とする天略理論。

今回の訪問を前に、『前回の訪問の際、小松社長が中国のインタビューに対し「隣人は選択できない。数千年の歴史の中で日中両国は大部分の時間、平和的に共存していた。近代になって生じた不幸な事態を、両国が日中関係の主流を見て取り、平和発展を堅持するよう希望する」と述べた想いが、禍転じて福となすのことわざのとおり、どのように中国国内で取り入れられているのか、今回の再訪問で潮流の真っ只中にある日中韓の現状を感じたい。』と記したが、部分的ではあるが、現場・現物・現実に触れ、国家の思惑、国民の想い、平和を願う多くの友人の志を感じ、国家レベルと国民レベルの潮流を感じた視察となった。同行の機会を戴いた小松社長をはじめ、日程のすべての手配をいただいた魏亜玲さん、異なったジャンルから適切なアドバイスを戴いた寺戸様に感謝します。

以上

【添付資料-1】

ルース・ハロー博士（Dr.Ruth Halla ドイツ人慰安婦研究）（日本語通訳蘆様）スピーチ

慰安所にいた被害者は決して売春婦ではない。慰安婦は誘拐、法律に反した行為、色んな手口で集められた。慰安所に来てしまった女性たちに、もう自由はない。1937 年南京大虐殺が行われ、30 万人以上の中国人が殺害され、2 万件以上の強姦、輪姦事件があった。これらに事実に対して、世界各国から日本へ対して色んな反発、非難があり、その反響を受けて日本政府は責任を感じたと思っている。特に南京の強姦事件がきっかけとなって、どのように事件を抑えることができるのか考え、対策として日本軍が駐留するところに慰安所を作った。慰安所は言い換えれば「外での強姦を室内で行えるようにしたシステム」である。非常に残忍な制度で、女性にとって許されないシステムであり、日本軍が女性の人権を系



参加者を前にスピーチするルース・ハロー博士（右端）

統的に奪うシステムだ。女性の平均年齢は 20 歳から 24 歳がほとんどで、慰安所に閉じ込められた慰安婦は、多い日には一日 50 人を相手にしなければならなかった。被害者は慰安所で自殺した女性もいる、性病にかかった女性もいる、全てが残忍な結果だった。戦争が終わり被害者たちは自国に戻ったが、このような歴史は世界各国にある。身体に対する加害だけでなく、精神的にも非常にダメージを与えた。歴史を知らなくてはならない。彼女たちを助けなくてはならない。しかし、慰安婦であったことは恥ずかしい、言いづらいことであり、表面化しているのは本当に少ない。被害者たちは、自身はもちろん家族が貧乏で幸せではない人生を強いられています。この事実を知っていただきたい。

最後に、慰安婦問題を研究するものとして、是非ともこの場所で研究の一端をスピーチしたいと思っていました。それが実現でき、皆さんの前でお話しできました。ありがとうございました。

【添付資料-2】

慰安所に掲示されたプレート「まえがき」

「慰安婦」とは、強制的に日本軍に性的サービスを提供させられ、性奴隷にされた女性のことを示します。戦時、日本軍国主義は詐欺、略取や脅迫等の手段で、日本本土から遠く離れた数量膨大な日本軍のため、中国、朝鮮半島、フィリピン、タイ、ミャンマー、ベトナム等



第二次世界大戦の性奴隷のまえがき

東南アジア各地及び太平洋諸島、また日本本土から大量の若い女性を性奴隷として強制徴集し、完全な軍隊「慰安婦」制度を設立した。中国は日本軍「慰安婦」制度の最大被害国であり、中国で設置された慰安所が最も多く、時間が最も長く、規模が最も大きいものです。20 数万の女性が強制的に日本軍の性奴隷にされ、数多くの女性が残酷な性的虐待で命を失いました。日本軍国主義が実施した「慰安婦」制度は、女性の人権を踏みにじり、国際人道法や戦争法規に違反した制度化された国の犯罪行為であり、ファシズムが女性を集団的奴隷化する暴行です。それは、日本軍国主義の野蛮、残虐や暴挙を十分に暴露し、戦争が人類に残した最も悲惨で忘れられない記憶です。



>>>>

対立から共生へ

小松昭夫の「和の文化」の理念と実践

2015 年 12 月 15 日（火）14:30～17:30

北京・長富宮飯店（ホテルニューオータニ）に於いて

北京 学苑出版社・一般財団法人人間自然科学研究所 共催

出版祝賀会報告

魏亜玲

2015 年 12 月 26 日

◆参加者：約 70 人

日中関係方（日本留学と勤務の経験者、中日研究家、日中友好団体）、企業経営者、及び映画関係、新華社、人民網、人民中国などのディア関係者、日本北京在住の日本企業（日本電産シンポ北京事務所北島様）、通訳翻訳日中交流者（中共中央翻訳局吉田様、北京日本人学術交流会 山口様）、毎日新聞の西岡さんなど

懇親会参加：49 人

◆スケジュール

・司会 学苑出版社 劉峰

・来賓紹介

・主催者挨拶

1、学苑出版社 孟白

2、一般財団法人人間自然科学研究所理事長 小松昭夫

※研究所活動映像放映：中国語字幕 14 分間

・新書紹介：張可喜、魏亜玲

・自由発言

・書画家より小松昭夫理事長へ作品贈呈

・「和の文化研究会」の発足を、張可喜より発表

・閉会

・懇親交流会

◆開会 劉峰氏より

・はじめに

ご来場の皆さま、こんにちは。

本日午後、ここで、私達と一緒に「対立から共生へ 小松昭夫の「和の文化」の理論と実践」の出版記念会を開催します。

私は、司会を務めさせて頂いている、学苑出版社の劉峰と申します。

日本で成功した企業家の中では、利益の一部を社会福祉や慈善へ回し、また文化、教育、科学技術の発展のスポンサーになる経営者が多いが、企業の利益を平和運動に使用する企業経営者は多く見えないです。小松昭夫氏はその中の代表的な一人であります。

小松昭夫先生の平和主義の特徴は、戦争に反対、平和を大切にし、「和議」を主張し、「和の文化」の創造です。小松先生は、歴史において親密な文化交流をしていた北東アジア地域で和の文化圏を作るのを望んでいます。この崇高な偉大な理想は実現させるのに容易ではないと思われますが、そのためにわれわれと一緒に努力させて頂くべきものです。張可喜先生と魏亜玲女史が小松先生の和の文化の理念と実績について編纂したこの一冊となっています。これは小松先生の講演、発表文章、メディア取材報道などの資

料、及び直接に小松先生との交流から総括、整理したものです。目的は「和の文化」精神を宣伝し、たくさんの人々に小松先生の平和事業のための活動を知って頂き、平和・反戦の活動に参加して頂くことを願っているものです。本日、これから皆さんと一緒に平和について語り合しましょう。

◆来賓紹介

小松電機産業株式会社 社長 小松昭夫先生

学苑出版社 社長 孟白先生

秦篆書道家 張文緒先生

東方心理学首創者、首席導師 馬一友先生（馬光武）

元新華社記者 本書作家 張可喜先生

◆挨拶

・学苑出版社社長孟白様より挨拶

本日、皆様に当出版式典、または記念会にご出席いただき、大変喜んでます。私は小松先生とは十何年間の付き合いです。張可喜先生と魏亜玲女史とも知り合ってから十数年となっています。私たちの交流は、ほとんど中国伝統文化を海外、例えば日本、韓国、その他の国へ伝播する内容です。10 年前、小松先生の協力で学者らを集め「中国古典名言録」を編纂し出版しました。日中韓英の 4 か国語でした。当時の目的は中国古典の賢人の名言、警句、思惟、世界観や人生にヒントを与える哲学的な言葉などの内容を抽出し一冊に纏めました。その後の交流も続いています。形が違うかもしれませんが、宗旨は同じ、つまり小松先生が提唱した「和の文化」、共生、共存、戦争不要、要平和の内容です。小松先生が一人の経営者として、このような世界平和のために行っていることに個人的に大変敬服しています。小松先生は大変理想主義者だと思います。21 世紀において稀の理想主義者です。彼は非常に大きな力をこの平和事業に投入しています。将来の見通しがどうか、効果がどうか、彼はあまり気にしていない。それに対して話しあったことがあり、ある事はやる人がいなければ成功がない、私がやった、やった分は成功できる、やれるところまでやって今後の成功に役に立つかもしれないとのことに大変感心しています。小松先生は、私より 10 歳年上ぐらい、彼の中で活力が見えています。その活力は今の 20、30、40 代の若者から見えないです。この点について驚いています。私は私の模範となり、小松先生の年になったとき、このように活動があるように願っています。今回の出版に当たりまして、この本は、多くの時間をかけて大量の背景資料を収め、小松先生と直接にインタビューしたりして資料の集まりは十分でしたが、出版社の立場では、整理の時間が足らなかったと、見えています。時間をかけて最善まで整理したほうが良いと思いました。でも、今年、この本を出版するのが特別な大きな意義があります。今年は抗日戦争勝利 70 周年に当たる年です。70 年前、日本からの中国侵略戦争が終りました。この歴史は覚えるべき、今年にこの本を出版するのが小松先生の理念性と一部の日本人の理念を表していたものだと思います。中国では、時には理念を表すのは一時的、突発的なことがあります、長期



的に一つのことを思惟形状、歴史の観点から考えていないのが多いかもしれない。一つの民族、自分でも歴史を重視しなければどうやって他の国に尊敬して頂くのかと思います。今年はとても特別の年です。出版時間も特別で、中国人、特に青少年に考えてほしい、考えてやるべき。この本の出版は、長い年月において交流してきた小松先生への問題用紙への小さな解答となるのを望んでいます。皆さんに読んで頂き、何かご意見やアドバイスを頂ければ幸いです。学苑出版社として今後も小松先生と協力していきたい、他の日本の友好的な人とも交流していきたい。平和共生と共同発展に役に立つ協力をしていきたいと願っています。

ありがとうございました。

・小松昭夫理事長より挨拶

12 月の忙しい中を、このようにたくさんの方々にこの会にご参加頂き、ありがとうございます。今年は第二次世界大戦 70 周年の特別な年となります。私は、8 月終わりに蘆橋溝記念館、そして 12 月 13 日に南京大虐殺犠牲者記念館から招待を受け、公祭式典（国家追悼式）に出席してきました。そして青空が澄んできた北京の天候の中で、このような会合をして頂き大変うれしく思っています。



張可喜先生と出会ったのは今から 15 年前です。私は、高速シートシャッター「門番」を開発し、今の日本の市場を作り、世界展開し、ニュービジネス賞をもらった、そのときの会合で、当時、新華社の記者で張先生とはじめて出会った。ビジネスをやっている人間が、どういうことでこのような世界に入ったかということ、それは 35 歳の時（1975 年）、韓国で、タクシーの中で、あった事件がきっかけとなっていた。そういう結果があることは必ず原因がある、そして背景がある。そして日本の歴史、今日までいろんな問題が出ており、この問題を災いという字がある。三重苦はあって、火をつけてそれを福に変えると、歴史問題について研究しはじめた。張可喜先生、簫向前先生、邢雁先生、張碧清先生、南京の朱成山先生など、たくさんの先生方々に大変お世話になりまして本日に至っています。今日はこのような素晴らしい会に参加して頂き、心から感謝しています。

◆HNS 紹介映像（中国語字幕 14 分）放映

◆「対立から共生へ」書籍の紹介

魏亜玲より書籍内容紹介：

和の文化理念、和の文化理念の形成過程、平和事業の活動と構想を詳細紹介

和：和諧、和譲、暴力無し

「和の文化」理念と形成過程：

「対立・統合・発展」。韓国タクシーの遭遇による歴史研究がスタート、戦後責任を果たす。

HNS 研究所設立経緯、和譲の由来、和の文化理念の形成経緯、

平和活動：これまでの活動を紹介

構想：未来を拓く「国際平和センター」を創設、構成される 3 つの主要施設を紹介

（1）世界戦争平和映像センター

世界の戦争・平和博物館を情報技術通信（ICT）で結び、写真・映像・音楽・芸術で総合的に学ぶことができ、世界の戦争・平和博物館の入り口の役割を果たす人類進化センターを建立。

（２）メモリアルタワー

世界の近代戦争すべての戦没者数、名前、写真、経歴を電子データで遠隔から永遠に記録し、閲覧できるメモリアルタワーを建設。

（３）和の殿堂

共感の場を作り、対立、統合、発展が循環する「和の文化」を生み出す「殿堂」を最先端の科学技術と ICT を活かし建設。平和会議、平和貢献者への顕彰、「知のオリンピック」等を開催。

・張可喜より本書の編纂背景、目的紹介

小松先生と知り合った時からこの人の人柄や世界観について独特な特徴があると感じた。素晴らしい経営者と同時に偉大な平和活動家である。2013 年「朝鮮半島と日本列島の使命」という本を中国で出版できないかとの話があったが、それより中国の皆さんに中国と小松昭夫の平和理念を紹介したらと思い、魏さんと一緒に分担して書いた。この本を書いたもう一つの理由は先ほど話があった、小松先生と交流のある先輩の簫向前先生、邢雁先生、張碧清先生などが亡くなっておられ、自分も年を取ってきた、もっと若い人に継承してもらわないとの危機感を感じた。もちろん孟社長はいるが、もっとたくさんの人に関与してほしいとの思いもあった。

今回の著書中、日本の歴史や文化についてたくさん調べた。自分にとっても大変いい勉強になった。この本を出版した学苑出版社の孟社長、編集者の李さんに感謝している。皆さんに読んで頂きご指摘ほしい。

他に、会場の数名の方より和の文化についての感想について多数の発言があり、ここで次の一部を紹介。

◆来場者スピーチ

・馬一友（馬光武）先生：

皆様、こんにちは。本日張可喜先生と魏亜玲先生の「対立から共生」の出版会に参加できて嬉しく思っている。東方心理学首創者、首席導師の馬一友（本名馬光武）、小松社長と知り合ったのは 18 年のこと。小松先生は戦争反対、平和創造に貢献しており、私の人生の師匠であり、敬意を表させて頂く。小松社長と一緒に蘆溝橋記念館、ハルビンの 731 軍隊生化学兵器基地遺跡、9・18 博物館、抗日戦争記念館、南京大虐殺記念館、台児荘大戦記念館など、訪問した。演説、日本軍国主義者が中国で犯した犯罪にお詫びしているが、小松先生は、自分の家族が戦場には出ていない。父さんは銀行員だった。2002 年 10 月、天津で開催される日中韓都市建設に関するシンポジウムと一緒に参加した。日



中韓から知名人や経営者が集まる会合だった。懇親会の際、論語を 3 か国語で出版し、孔子孟子像を自払いで作って日本の燕趙園へ寄付など、中国人より中国の伝統的なものを大事にされていること、中国で、ビジネスでは儲けることが、平和活動にたくさん尽力し資金も多額の資金を投入していると、小松社長のことを参加者に紹介したところ、参会者がやってきて名刺交換したりして交流していた。中国の経営者は何人が小松先生のように平和のために活動しているのか、中国人より中国の古典を大事にされ、平和のために活動していると、皆が感心したと覚えている。今でも中国心理学での講義したときも小松先生の話をしている。

小松社長が日本で「再会」という映画を上映され、見たが、戦争後中国に残留孤児として中国人の父母に育てられ感謝しているとのシーンが印象に残っている。右翼の抗議の中で活動している。この機会以上心からの話をさせて頂いた、ありがとうございました。

・高海寛様（新華社世界問題研究センター 研究員）



この本の出版について所感を述べる。この本は、抗日戦争勝利 70 周年に出版したもので、とても良い事。日本の書店には中国脅威論に関連する本ばかり並んでいるが、このような正義感、良知のある、科学的、合理的な本はとても貴重な本である。小松先生 の思想と行動がこの本に凝集されている。張先生と魏様の大変努力で出版できた。ご出版に喜んでおり、祝うべき、おめでとう！大使館から戻ってから歴史の本を読んでいた。45 年生まれ私達は戦争のこと、特に若い人は認識が薄い、残念に思う。この和、和譲の精神が大切。日本が韓国、中国に対しての過去は流血の歴史だった。今の日本政府は右翼勢力がまだ根強い。小松先生の行動は日本政府の行動とまったく違う。

哈爾浜に安重根記念館を作ったとき、日本政府は安重根がテロと批判された。当時の責任者の伊藤博文を殺した安重根がテロとして処刑されたのに対して、何百万の韓国人を殺した伊藤博文が民族英雄として扱いされている。日本政府の認識は被害国と違う。このようなことは若者が分からない。過去の歴史に明白な認識がなければいけない、この点について、小松先生が実践しており、これに対して尊敬すべき、敬意を表すべき。

先日、沖縄からの方と話していた。1872 年沖縄に日本に合併したこと、たくさんの人は知らない。日本政府の軍国主義については沖縄処分から考えるべき、その後の中国、台湾、韓国を侵略された歴史を認識すべき。最近、知っている日本人から韓国人が嫌い聞いたが、過去に韓国を植民地にして王妃を殺し、たくさんの韓国人を殺した。韓国人に日本名、日本語に強制的に押し付けられたのにどう思うかと思った。また、昔、日本軍が入ったとき、中国人には白米を食べてはいけない、たくさん残酷なことをしていたと話すと、なぜですかと、聞かれた。このような過去の歴史は若者が知らない、忘れてはいけないが、恨みを覚えてはいけない。

小松先生の和の文化、優秀の文化の概念、平和、和諧、このような思想は現在の日本政府に知ってほしい。小松先生は、安倍政府の見解をよく知っておられると見ている。この和

の文化の理念を勇気のある実践へ実行しているのが素晴らしい。小松先生は日中の古典を含むたくさんの本を読んでおられることと思う。以上、ありがとう。

・著者の張可喜より本に書いていないことも披露された。

この本は日本語版を出版する予定もしている。「和の文化」の理念は中国人に知ってもらいたいし、平和憲法の改憲、積極的な平和主義と主張している勢力の中で、日本のたくさんの国民や安倍政権に知ってもらいたい。また、この本の中に書いていない内容があるので、ここで話をさせて頂く。

小松社長が交流しておられた肖向前先生、張碧清先生、邢雁先生が亡くなったあと、故人の先生方の自宅までご霊前をもって先生への追悼、家族訪問に行かれた。日本人の友人としてそこまでやっていることが私どもに学ぶべき。8 月、張玉屏様に紹介され、中日友好協会に主催された 70 周年記念コイン展示会に参加した際、一人の元八路軍兵士と出会って交流されていた。交流中、この八路軍元兵士と抱擁されていた。残念ながら写真には間に合わなかったが、このような小さいことから小松先生がいかに優しい平和主義なのか、分かってくる。

第 4 章において、慰安婦の尊厳について、そして安重根を英雄と称していることなどで、日本国内で右翼勢力に抗議され、たくさん脅迫されていたことについて最初たくさん書いた。目的は小松先生の素晴らしいイメージをアップさせるためだったが、小松先生と相談したら却下されたため淡々に簡単に整理することになっていた。

企業界では、怪人奇人といわれる独特な方で、対立から共生への精神は尊敬すべき方である。



・孫前進様（北京物流大学教授・秦藤物流会社社長）より

退職したが、小松先生と出会って数年になる。近年の日中関係の緊迫感のある中、この本を今年 70 周年の特別の時期に出版されたこと、大きな意義がある。民間人、企業家として会社を経営しており、開発生産した 15 万台以上の「門番」（高速シートシャッター）と「水神」（クラウドによる総合水管理システム）をやって儲けたお金を大量に平和事業へ使っている。精力をも全部平和事業に投入している。感動的である。

中国の戦争記念館はほとんど訪問されている。経営者としてこれほど平和のことに尽力されている小松先生の「和の文化」、活動に大変敬服している。燕趙園も案内され、行ってきた。

論語について私も言えない、解釈できないのに対してたくさん口に出される。尊敬すべき、敬服している。

「和為貴」（和を持って貴しと為す）は、中国だけではなく、アジア、世界のものである。経済管理大学、商学大学があるが、経済と商業との違いは何か、商とは「和為貴」である。管理では、経済活動を見る。

これは思惟方式である。張先生と魏さんが書いたこの本の過程について最初から知っていた。2 年以上の時間がかかっていた。和について、国と国の事も、職場や、人対人でも同じ、和の精神でやっていけば仲良くなれる。小松先生の「和の文化」をもっと早く知っていたらよ

かった。最近退職してこれまでのことを和の精神で反省している。この本をたくさんの人に勧め、読んでもらうように、小松先生にもっと教えて頂きたい、そして皆さんの感想もたくさんの人に伝えるように、ありがとうございました。

・陳洪真様（鋼鉄研究総合金鋼研究部技師）より

東京大学で学者訪問者として日本に滞在したとき、鳥取と島根に行ったことがあり、島根県は景色も綺麗で、人々も親切だった思い出がある。小松先生はあの優しい環境で生まれ育ちのおかげで平和主義者となっているのかと思う。小松様の経営理念に感心している。一人の合金研究者として物事がすべて動的存在となっているように平和事業も常に変化している。



・許吉星様（中日関係史学会 理事）

小松先生の平和活動に感心している。安倍政権とは違って日本の国民が平和を大切しているのが主流である。

和の文化は中日の国民の心の中の文化であり、強調すべき、後世に残るべき、歴史を良い方向に向けるように。

私が日本で留学時の先生も平和主義者である。日本の近代史では、民主主義者がたくさんいた。

日本の国民は軍国主義ではなく、日本政府に騙されている。今の安倍政権は日本国民をどこまで連れていくのか。私達は「和の文化」で推進するとき、誤った歴史観を明白にすべき。例えば、近代歴史では、植民地のアジアを助けるため、アジア大共栄圏を作る、東北にたくさん施設を作ってあげたなど、と主張していたが、東北地域を占領されたあと、全面戦略に発展させた。

また、われわれの一部の報道では、日本人と日本軍国主義と区別していないのがよくない、分けるべき。過去、なぜたくさんの人が軍国主義になったか、軍国主義の体質から始まった。子供時代から軍国主義の教育を受けていた。

毛沢東時代でも、「過去の戦争は 3500 万人に、日本にも 270 万人の犠牲を齎せた。戦争犯罪は一部少数者であり、日本の国民も被害者である」と主張していた。今の時代になって、安倍政権は中国と戦っても勝つことがない。

なお、近代史でも、日本の戦前、女性の選挙権がなかった。軍国主義は明治維新以降、国民に軍国主義に訓練され、平和主義者が鎮圧された。古代の日本は軍国主義ではなかった。民族の本質は和を大切にすることであった。戦後、平和憲法のおかげで 70 年間で平和でやってきた。

小松先生の和の文化は中日の主流である。両国のためにたくさんの国民が小松先生と同じように平和のために活動している。杭州の西湖の湖畔に「中日不再戦」という石碑が立てられている。和の文化をたくさんの人に知ってもらいたい。戦争を防ぎ、平和主義精神を高揚し友好で発展していく。



・張煥利様、新華社世界問題研究員 より

本日、「対立から共生へ」の出版、おめでとう！
張可喜先生と同僚、机は向き合っている。以前から小松先生の平和活動を聞いている。小松先生と直接に会うのが初めて。
この本は中日の将来のために出版した、残念ながら日本政府は過去の戦争に反省のない言動が出ている。でも、これに対して中日の平和を大切にしている日本の大勢の皆さんに批判されている。

最近、南京大虐殺記念館の世界記録遺産登録がされたことに対して日本政府から批判されていた。日本も申請すべき、つまり戦時、北京東郊外の通州で 200 日本人が中国人に殺されたことを遺産登録すべきとのニュースだった。それを見て大変驚いた。侵略者として中国に入ったのに侵略者を反抗するのが当たり前なのにどうして世界遺産申請するのか、日本はどのような方向に向けようとしているのか。

小松先生の言論、観点、思想から見て戦争反対である。中日の皆さんの模範となる。この本は鮮明に軍国主義を批判されていたと思う。ありがとう！

◆「和の文化研究会」発足

張可喜先生より発表、呼び掛けられ、早速 24 日に 10 名のメンバーの申込み者となっている。詳細は次の通りです。

「和の文化研究会」提案書

「和譲」精神を高揚し、「対立から共生へ」、「災いを転じて福となす」をさせるというのが、日本事業家、著名な平和活動家である小松昭夫氏の「和の文化」理念である。この理念を具現化にさせていけば、われわれ北東アジアの中国、日本、韓国 3 カ国の歴史的和解、平和共存、互惠互利、ウィンウィン、運命的アジア連合体へ発展させることができる。そしてアジア地域に共同繁栄、発展の新しい共同体へ推進させることで、アジアの共同発展、繁栄の新時代、本当な意義のある「アジア時代」を迎えられる。

小松昭夫氏は各国の国民の根本的利益に、そして、歴史の流れにそった平和理念を提案された。それは普及と実施に努力すべき、実用的な意義を持っているものである。したがって、私が、「和の文化研究会」を立ち上げることを提案し、皆さんに自発的に参加して頂き、一緒に「和譲」精神を高揚し、それについての研究を推進する。

当面の計画として、研究会は週に一回（土曜日利用）に集まり（交流、所感共有）、三か月に一回見学、訪問を行い、年に一回、国内外でシンポジウムを開催することを考えている。

交流、所感論文を整理して印刷して交流用の資料にとする。各位がこの「対立から共生へ」の本を読んで頂いてから積極的に申し込んでください。楽しみに待っている。

発起人 張喜喜
2015 年 12 月 15 日



◆「和の文化」研究会メンバー

- 2015 年 12 月 24 日 申込み者：10 名
張可喜 新華社世界問題研究所研究員
張文諸 秦篆書道家
高 恒 国際問題専門家
許吉星 中日友好団体責任者
馬徳和 映画製作公司 総経理（社長）
陳洪真 日本企業文化研究家
白易蘭 元全国婦人連合会国際部部长
周継勝 元外交官
張 哲 『人民中国』雑誌編集長
羅 瑛 国家図書館職員

◆閉会

◆懇親交流会（17:45～20:30）

懇親会での交流も盛り上がっていた。映画監督の李様は映画にしたらとの提案もあった。和の文化研究会に参加するとその場で、数人が申し込んでいた。また、会場で、現在の日本政府を批判された発言について、本日の出版記念会場で、話すべきではないとの反対意見もあった。

◆本記念会について報道関係より 5 か所（新華社網、人民網、人民中国雑誌、香港大公網、日本の毎日新聞）が来場されたが、次の通り一部公開されている。

- ・新華社ネット：
中国語 http://japan.xinhuanet.com/2015-12/16/c_134923210.htm
日本語 http://jp.xinhuanet.com/2015-12/17/c_134926100.htm
- ・香港大公ネット：
中国語 <http://news.takungpao.com/world/roll/2015-12/3255278.html>
- ・人民中国：
http://mp.weixin.qq.com/s?__biz=MjM5NDIyNTQxMw==&mid=401506446&idx=1&sn=d85432f4320297c37d5a0ddfcdc3c56b&scene=0#wechat_redirect

※以下は、中国新華社 HP より http://jp.xinhuanet.com/2015-12/17/c_134926100.htm



『対立から共生へ 小松昭夫の「和の文化」の 理念と実践』出版記念会が北京で開催され

jp.xinhuanet.com | 発表時間 2015-12-17 10:45:04 | 新華網日本語 | 編集: 王珊寧

小中大



『対立から共生へ 小松昭夫の「和の文化」の 理念と実践』出版記念会の現場

【新華社北京 12 月 17 日】12 月 15 日の午後、『対立から共生へ 小松昭夫の「和の文化」の 理念と実践』出版記念会が北京で開催された。

『対立から共生へ』という本が元日本駐在新華社記者で、現在、新華社世界問題研究センターの研究員である張可喜氏と日本・財団法人人間自然科学研究所理事の魏亜玲氏の編著で、学苑出版社から出版された。当書の著者は日本の著名な企業家、小松昭夫氏がこれまでに発表した文章や講演、小松昭夫氏へのメディア取材の関連記事及び著者が小松昭夫氏と交流して感じたことなどに対して総括を加えて整理し、小松昭夫氏と「和の文化」の理念及び 20 数年間にわたり各地で反戦平和活動を展開してきた功績について、系統的に紹介している。

日本・小松電機産業株式会社の代表取締役小松昭夫氏、学苑出版社社長兼総編集長の孟白氏、当書の著者である張可喜氏及び魏亜玲氏といった中日各界の関係者 60 数人が出版記念会に出席した。記念会に出席したゲストは当書の出版を比較的高く評価し、また小松昭夫氏の平和理念や実践行動を肯定的に捉えた。

魏亜玲氏の紹介によると、小松昭夫氏は日本・島根県の出身で、1973 年に小松電機産業株式会社創設した。彼は平和を愛し、戦争に反対して、1994 年に財団法人「人間自然科学研究所」を設立し、和譲精神を発揚し、戦後の責任を履行し、対立から共生へと向かっていく「和の文化」の理念を宣伝した。長年に渡り、小松昭夫氏は世界各地の平和記念館を訪問し、また追悼、献花、「意向書」の読み上げ及び寄付などの活動を開催しており、その足取りは中国、韓国、ロシアなどのアジア隣国や複数の欧米諸国にまで及んでいる。小松昭夫氏は日本

の訪中団を何度も組織し、北京の盧溝橋抗日戦争記念館、侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館、瀋陽九・一八事变歴史博物館、侵華日軍第 731 部隊遺跡や安重根義士記念館、海南島の日本軍に強制労働させられた犠牲者遺跡、及び台児荘大戦記念館などを訪問してきた。

更に、小松昭夫氏は「戦後責任」論も提起している。彼は、「戦争責任は戦争を未然に防げなかった戦前責任、戦時責任そして戦後責任に分けることができる。いわゆる戦後責任とは、戦争へと向かったいきさつと背景、戦闘行為及び現代社会の問題を調査・研究し、またこのような成果を二度と戦争を発動せず、恒久平和を創造する資源とさせることだ」とみなしている。そして、小松昭夫氏は、日本軍がかつてアジア諸国を侵略して多大な犠牲をもたらしたが、日本はこれに対しまだ戦後責任を果たしていないと考えているという。

張可喜氏は出版記念会で次のような見方を示した。小松昭夫氏の「戦後責任」論は歴史の流れに一致し、日本の歴史認識問題の解決のために正しい思考を与えている。「戦後責任」を履行し、「和の文化」の理念を实践してようやく、東アジア諸国に平和的共存、協力・ウィンウィンを実現させることができる。張可喜氏は出版記念会で『「和の文化研究会」の設立に関する提案書』を読み上げ、より多くの人々が小松昭夫氏の「和の文化」の精神を学習し、反戦平和行動に参加するよう呼びかけた。

(記者/張一、王珊寧)



『対立から共生へ 小松昭夫の「和の文化」の 理念と実践』出版記念会の現場



小松昭夫氏は記念会で演説した。



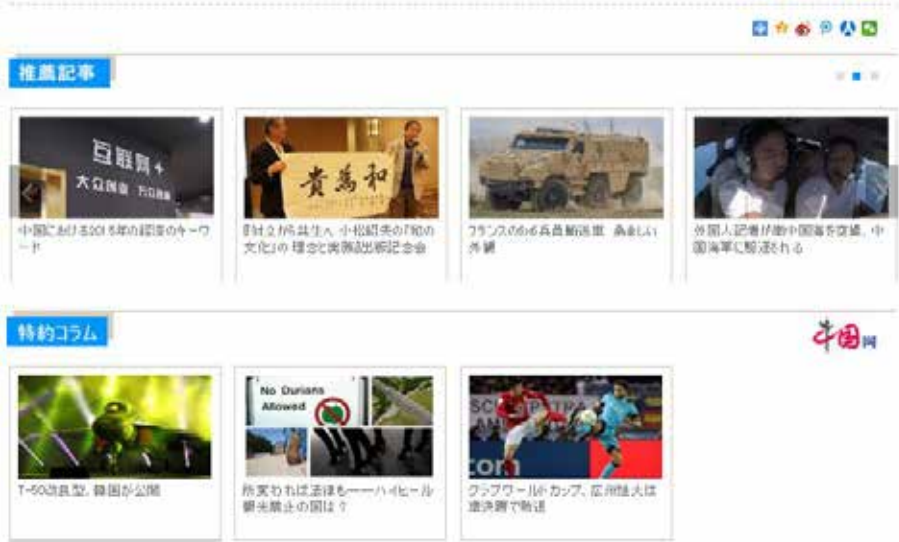
当書の著者である魏亜玲氏は記念会で演説した。



当書の著者である張可喜氏は記念会で演説した。



当書の著者である張可喜氏と魏亜玲氏は一緒に記念写真を撮った。



元中国農業大学教授の張文緒氏は小松昭夫氏に「宏揚和讓精神(和讓という精神を発揚)」という秦篆書道作品を贈った。



当書の著者である張可喜氏は河南省新郷市古壩書画院研究会の常紹俊副会長のかわりに、小松昭夫氏に書道作品「和為貴(和をもって、貴しとなす)」を贈った。

所感（魏）

今回の書籍の出版に当たりまして張可喜先生の多大な努力、学苑出版社の孟社長、李点点編集長のご協力、また、営業部窓口の皆さんのご協力を頂いたおかげで、出版ができました。感謝しています。私に著者としてこの機会を与えて頂いたこと、これ以上の光栄のことがありません。

2013 年構想から資料の収集をはじめ、最初は「中国と小松昭夫」との題名となっていたのですが、資料から整理しているうち、最も相応しい『対立から共生へ 小松昭夫の「和の文化」の理念と実践』という題名となりました。資料収集から調べと纏めまで、2 年以上かかりました。私のほうでは、今年 4 月までは、業務をしながら進めていたのですが、5～8 月、業務から外させて頂き、専念に取り組ませて頂きました。原稿確定までは、夜遅く、休日なしでしていたことから、一冊の本を出版するのにこんなに大変だと初めて分かりました。大変貴重な体験をさせて頂きました。

出版記念会は、8 月末、70 周年記念のイベントとして企画したのですが、出版社の編集が間に合わないため今月 15 日となりました。そして、10 月に出版社に進捗を確認したところ、12 月 11 日～15 日出版予定とのことで、12 月 13 日の南京記念館式典に合わせて、12 月 15 日に記念会開催を企画しましたが、実際にその後でも、原稿の編集が続いておられ、最終的に確実に孟社長に許可されたのが 12 月 4 日で、5 日でも写真変更したりしていました。計画通り記念会開催との最終確定が 12 月 5 日 19:35 でした。それにしても 70 人近くの人に参加して頂き、またたくさんの意見を頂き、日中をはじめ世界の平和に関心を持っておられることに大変感動しました。そして、張先生の「和の文化の研究会の提案」が発表された後、申込みが相次ぎ、現在 10 名申し込んでおられます。早速 1 月設立式典を開催されることになっています。

今回、北京では、それまで続いていた大気汚染天候（PM2.5）が見えずに奇跡的な青空で、私達を迎えてくれました。それが日中をはじめ世界の平和事業がこれから良いスタートとつながっていく兆しとして願っています。

そして、来年 3 月に日本で、日本語で出版することを予定しており、それまでに業務の皆さんをはじめ皆様に引き続きまたのご協力を頂けたらと思います。

この度、本当にありがとうございました。

以上です。



WA-JO
IZUMO

The radiant beauty of the world
Compels my inmost soul to free God-given powers of my nature
That they may soar into the cosmos,
To take wing from my Self And trustingly to seek myself
In cosmic light and cosmic warmth.

和 讓



人間自然科学研究所

<https://www.hns.gr.jp/>

〒 690-0046 島根県松江市乃木福富町 735-188

TEL : 050-3161-2490

FAX : 050-3161-3846

